

第4回アジア太平洋社会学会大会：シンポジウム(2000年9月16日)

アジアの若者はどこへ行くのか

—試されるアジア的価値—

パネリスト チョン・ジーヨン¹⁾

ステラ・クォー²⁾

杉本良夫³⁾

川勝平太⁴⁾

コーディネーター 高坂健次⁵⁾

司会 これより「アジアの若者はどこへ行くのか—試されるアジア的価値—」のパネルディスカッションを始めたいと存じます。 それでは、本日のパネリストの皆様をご紹介します。

最初のパネリストは、チョン・ジーヨン（鄭智泳）さんです。チョンさんは、チョンジュ（青州）に生まれ高麗大学をご卒業後、映画同人グループに参加、朝鮮戦争時代のバルチザン部隊の壮絶な戦いを描いた『南部軍』を90年に制作しました。社会派の映画監督として高い評価を受け、ベトナム戦争に参戦した韓国軍兵士とその後を描いた、92年制作の『ホワイ・バッジ』では、東京国際映画祭でグランプリと最優秀監督賞を受賞されました。本日は、映画人から見たアジアのつながりについて、お伺いしたいと思います。

続きましては、ステラ・R・クォー先生です。クォー先生は、コロンビア国立大学をご卒業後、アメリカ・フロリダ州立大学で社会学修士、シンガポール大学で社会学のPh.Dを取得、72年以来シンガポール大学で教育研究に従事されています。専攻は家族社会学、医療社会学、社会政策でいらっしゃいます。また、94年から98年には国際社会学会の副会長も歴任なさっておられます。

続きましては、杉本良夫教授です。杉本教授は、京都大学法学部をご卒業後、新聞記者を経て、アメリカのピッツバーグ大学でPh.Dを取得、73年からはオーストラリアのラトロブ大学

で教鞭をとり、現在は同大学の人文社会科学部教授としてご活躍されておられます。また、NHKラジオ深夜便では「ワールドネットワーク」のコーナーで、メルボルンを担当されています。

続きましては、先ほど「海と生きるアジア—交流で開く世紀へ—」というテーマで、これからの大学のあり方などの提言も含めまして、基調講演をいただきました川勝平太教授でございます。

おしまいに、今回のパネルディスカッションのコーディネーターをご紹介します。コーディネーターは関西学院大学教授の高坂健次先生です。高坂先生は、関西学院大学社会学部を卒業後、大阪大学大学院を経て、アメリカ・ピッツバーグ大学でPh.Dを取得、85年から関西学院大学社会学部で教鞭をとり、86年に教授。99年には社会学部長にご就任されました。

それでは、ここからは高坂先生にマイクをお渡しして進行していただきます。

高坂 皆さん、こんにちは。きょうのシンポジウムには2つの特徴があると思います。ご承知のように、新聞紙上その他でアジアをテーマにしたシンポジウムはたくさん行われております。しかしながら、その多くは政治あるいは経済に関するものであります。私たちのシンポジウムはそうではなくて、文化あるいは「価値」といったものに焦点を合わせたいと思います。なぜならば、経済的

1) 韓国・映画監督

2) シンガポール国立大学準教授

3) オーストラリア・ラトロブ大学教授

4) 国際日本文化研究センター教授

5) 関西学院大学教授

な営みであれ政治的な営みであれ、それ自体は基本的には私たちの生活における日々の考え方、発想、着想、あるいは利害観、そういったものによって作られているのではないかというふうに思うからであります。

第2の特徴は、「若者」にあります。若者が将来を背負っていく、これは自明の理でございます。基調講演にもございましたけれども、私どもは、後に続く若者の世代に対して、その人たちができるだけ働きやすい、そして仕事をしやすいような環境をつくり上げていく責任を負っていると思います。きょうは、アジアという地域的広がりの中で、その問題を追究していきたいと思います。さっそく、中身の議論に入っていきたいと思います。

大きくは3つの柱を考えておりますが、まず第1番目の柱に入りたいと思います。まずパネリストの方々が、それぞれの職業的なご経験、あるいは調査・研究の成果を通して、アジアの若者についてどういうイメージを持っていच्छるかを伺いしたいと思います。括弧つきではありますが「アジア的価値」というふうなものがあるのかどうか。あるとすれば、それはどういう形のものであるのか。どういう特徴があるのかというふうなことを、お一人ずつ語っていただこうと思います。まずは、チョン・ジーヨンさんからお願いしたいと思います。

チョン 皆さん、こんにちは。著名な学者さんたちの中に混じってみますと、アカデミックな本の並んだ本棚の中に、私一人漫画本として混ざっているような気がします。（これはジョークなので、笑ってくださいませんか。）私は、文化をつくる人間であって分析家ではないので、きょうのテーマに対しても、他のパネリストとはちょっと違った感受性的な面からのアプローチをとってみたいと思います。

まず、関西学院創立111周年、おめでとうございます。21世紀のスタートにあたって、こういうすばらしいシンポジウムを開いてくださったことを評価したいと思いますし、私を招いてくださって、ありがとうございました。

私は1940年代の生まれです。私より上の世代

は、日本の統治のもとで、日本文化を強要されました。ところが、私たちは、解放後に一方的に入ってきたアメリカの秩序、アメリカナイズーションの中で成長してきました。反共と反日を愛国の尺度と考えると、幼い時代を過ごしました。世界観、人生観が形成される20代は、韓国は政治的抑圧の時代で、経済的には発展の時代でした。分断が固定化してしまった国家体制の中で、20代から40代までを暮らしました。1950年には朝鮮戦争、60年代には四・一九革命、次いで軍事クーデターもありましたし、パク・チョンヒ大統領の維新体制があり、また五・一八の光州事変などの大変な激動期を経験しました。そうした中で自然に、支配的な安保体制を中心とした考え方に反対するようなセンスを身につけてきました。

90年代に入りまして、日本、中国、ベトナムなどを旅行いたしました。旅行の主目的が、映画ビジネスにありましたので、別段アジアの若者たちについて一生懸命研究したとかということではなく、断片的なイメージしか持つことができませんでした。ですから、今回のシンポジウムに向けて行われたアンケートの調査結果は、日本の学生と日本に留学しているアジアの学生たちに限られているという面では、ちょっと惜しいと思うのですが、最近のアジアの若者たちを理解するのに非常によい資料となりました。

もっとも、私は回答結果を100%信じたくはありません。たくさんの答えがありますけれども、アジアの若者たちは、比較的儒教的あるいは仏教的センスを今も持っていると思いますけれども、それよりも注目したいのは、問19に対する回答です。「文化が破壊されても情報は公開されなければならない」というところに70%が賛成しているにとどまっていますが、実際に私が教えている韓国の学生たちに、同じようなアンケートをやってみたところ、じつに90%以上がそれに賛成しました。若い人たちにとって、ここで言う海外の情報というのは、先進西洋社会、特にアメリカを中心に指しているように思えます。アジアの若者たちは、西欧中心的な思考を身に付けているように私には見えます。

それでは、西欧的思考ではないアジア的価値とは、どういうものでしょうか。これは、今現在ア

ジアの人たちが持っているもの、または追求しているものではなくて、既になくなってしまった、またはなくなりつつあるアジアの望ましい価値というふうに見たいと思います。アジアという地域は、ほかのどの地域よりも、地域的にも文化的にも非常に違った文化がたくさんあります。けれども、東アジアの儒教、仏教文化圏とインドなどのヒンドゥー文化圏の間には、そうした乖離にもかかわらず、ある程度共通に感じられる価値と道徳があります。

昔、韓国の人々は、家の前に種をまいて野菜をつくりました。そこからとれた野菜を食べて、そうして、食べた後はトイレに行かなければなりません。排泄するわけですが、その排泄物をまた畑にまいてこやしにします。そのこやしで育った野菜を食べて、また暮らします。ですから、自然と共存して、一緒に調和をなして生きてきたわけです。その反対に、西洋では作物を育てるために、農薬という化学物質をまきます。それを食べるわけですから、農薬にたまっていた有毒物質が人間の体に悪い作用を及ぼします。ですから、そこにまた、抗生物質というものをつくり出すわけですね。また、その副作用というものもあります。副作用を抑えるための薬品を、また発明する。このようにして、西洋人は自然を征服して、手なずけて生きてきた、そういう面があります。そういう面での挑戦というものを続けてきました。それが、西洋の生活です。

それに対して、東洋的な価値というものは、どうでしょうか。次のように、整理することができます。これは、いろんな人たちの意見をまとめたものです。東洋的な価値というのは、まず物質と精神は対立し合うものではなく、相互補完的な観念であるということです。それから第2に、人間中心的というよりは、東洋では生態を中心とした考え方があります。自然というものは、人間が征服しなければならないものではなく、調和して生きていくべきものです。それからまた、個人よりも共同体を重視し、軋轢よりは調和、無欲で中庸をいくということが大事だと考えられています。こうしたアジア的な価値というものは、良かれ悪しかれだんだんと変わっていています。特に、世界化、グローバル化という中で、

我々の世代はもちろん、若い人たちの中でも、急激に価値観が変化しています。西洋の個人主義的な考え方、人間中心がどんどん広がってきました。

これに対する私自身の考えを述べたいと思いますが、続けてよろしいでしょうか。

アジアの若い人たちの中に、普遍的な価値観はあるのか。私は、明らかにある、と思います。しかし、それは、彼らが先進文化だと考える西欧的な価値です。けれども、私たちの世代が経験したように、そうした思考は、自分の中に潜んでいる東洋的なアイデンティティー (identity) と必然的に対立してしまいます。

例えば、私が1994年につくった『ハリウッド・キッドの世界』という映画があります。ハリウッド・キッドというあだ名のついた男の子の話です。このハリウッド・キッドは、青年になって映画シナリオを1作つくります。そのシナリオは、友達の監督によって映画化されます。そして、その監督は、映画を撮り終わって編集をして「これは、ハリウッド映画のあらゆるものをコラージュしたものだ」ということを気づきます。そして、そのシナリオを書いた友達のところを訪ねていきます。「おまえは詐欺師だ」と言って、自分の怒りを爆発させます。そして、その主人公のハリウッド・キッドは、その監督の友達がなぜ怒るのかよくわかりません。そして、監督の友達は彼に対し、このシナリオは、ハリウッド映画の真似をしたものだというふうに確認をさせてくれます。ハリウッド・キッドはここで衝撃を受けます。なぜなら、そのコラージュというのは、自分が意図したものではなく、自分もわからないうちにそういうふうを書いてしまっていたからです。結局、ハリウッド・キッドというのは、自分がハリウッド映画に洗脳されてしまって、操り人形であったことがわかり、ここで自殺をしてしまいます。幼いときから自分の潜在意識に深く根ざしてしまったハリウッド映画のために、自分のアイデンティティーをどこにも見つけることができなかったために、自殺を選んだということになります。

もちろん若い世代が、これといった方向の設定もなく、新しい秩序、新しい文化にのみ込まれているというふうには思っていません。前の世代が

残した文化遺産、そして、新しく求められる価値観の中で、悩んで、そして模索している若者もいます。

私はこの時点で、ヤマダミズホという、日本の若い女性の言葉を引き合いに出したいと思います。彼女はこのように書いています。「私たちの世代は、私たちの前の世代が成し遂げた物質社会を何の苦労もなく受け継いで、消費社会に完全に従属させられてきました。一方では、物質文明の被害や精神面における欠陥を指摘され、『真の豊かさとは何か?』という問題を考えながら育ちました。皮肉なことに、私が成人式を迎えたその年に、バブル経済は崩壊しました。つまり、新世代は、物心がつく前から慣れ親しんできた日本の体制に疑問を提起しなければならないという矛盾した状況に置かれてしまったのです。」

これは、韓国の東亜日報社と日本の朝日新聞社が、戦後50年を記念して「韓日交流のための提案」というテーマで、両国の若者を対象に論文を公募したのですが、その入賞作品6点の一つから抜粋したものです。私が彼女の言葉を引用した理由は、彼女が自分自身の葛藤を、韓日交流を超えたアジア的アイデンティティーを模索することで克服しようとしていたからです。

ごく部分的ではありますが、現在アジアにおいては、西洋と東洋を織り交ぜた表象文化が生まれてきています。そして、これは国境を越え、アジアの人の「類似性」を伝達することで、ほどよい親近感を誘発しています。また、各国の伝統的な独自性は、新鮮かつ印象的な「相違」を伝達しています。この「相違」の中に発見される「類似性」を含んだ表象文化は、お互いの文化を理解しあうのに適しています。このように、アジアの共通の意識を軸として、私たち新世代が「アジア人」という名のアイデンティティーを獲得できるかもしれないことを示しています。

どの時代にあっても、支配的文化は批判と挑戦を受けてきたように、アメリカ化という支配的文化も、やはりこのような若者たちによって挑戦と批判を受けていると思います。彼らが模索している新しい世代の価値、アジア的価値は、伝統的なアジア的価値そのものではないとしても、これが完全に失われることはないとは私は確信しております。

す。

今日、国際政治の秩序、生態系の秩序は、日々に全世界の隅々を破壊しつつあります。湾岸戦争や核拡散防止条約、軍備競争、そしてボスニア内戦、少数民族の独立と葛藤、クローン人間など。西欧流の合理的思考は道具的機能はあっても、実質的機能を果たすことができません。これらを解決する方法は、人間、自然、宇宙を共存と調和の対象と見なす「アジア的価値」に立つてこそ見つけることができます。結局、「アジア的価値」というのは、アジアだけのためではなく、世界が必要としているものに他なりません。

では、「アジア的価値」を世界的に共有するためには、どのようなことが必要になるでしょうか。まず、アジアの幾つかの国が中心になって繰り広げられる運動、これだけでは望ましくないと 생각합니다。なぜなら、「アジア的価値」の必要性は、反西欧化それ自体にあるのではなく、望ましいグローバリゼーションにあるからです。ですが、残念なことに、アメリカが主導する世界化、グローバリゼーションが続く限り、西欧的価値を志向する傾向を押しとどめることはできません。かつて、ギリシャ文明は隆盛を誇りましたが、やがては衰退しました。ローマ文明も同じです。アメリカが主導する西欧文明も、いずれは衰退するだろうことを私は希望しております。

21世紀にはアジアの経済力が、世界経済を左右するだろうという展望が最近になってなされています。これは、世界の人びとが自分たちの富をつくり出すために、アジアにやって来るということです。言い換えれば、アジアの経済力が、世界経済において占める比重が高まり、今まで無批判に受け入れられてきた西欧的価値は、徐々にその勢いを失い、「アジア的価値」に対する関心が高まるということでもあります。

以上は、私の狭い見識でまとめた「アジア的価値」ですが、多少は感情的で、まだ不十分だと思います。私どもの将来のためには、本当に必要なアジアの普遍的な価値を確立しなければならないと思います。そのためには、アジアの人たちだけではなく、東洋と西洋のそれぞれの専門家が集まり、より幅広く論議されるべきだと思います。そして、そのための連帯、そして運動もグリーン

ピースのような、同じ共感を覚えるようなNGO、こういった連帯を通じて、純粋な草の根の運動で行われるべきだと思います。そうしてこそ、はじめてその目的に叶うと思います。

ベトナム戦争は、平和と共存を装ったアメリカの膨張主義に対し、反省のきっかけをつくりました。韓国には、モラルのない経済発展をもたらしました。同時に、アジアにおけるアメリカの指導力の弱体化ももたらしました。ベトナム戦争の戦後世代は、地理的位置と民族性から考えて、すでに無力化しはじめた社会主義をどのように克服し、世界秩序にいかん弾力的に適応するかによって、無限の可能性をもっていると思います。

私は『ホワイト・バッジ』という映画を、ベトナム戦争に対する批判的な観点からつくりました。日本でこの映画が上映されたときに、ある観客がこういう質問をしました。「韓国政府は、ベトナム国民に謝罪すべきだと思うか」と。私は次のように答えました。「もちろんです。韓国政府は、ベトナム国民に謝罪しなければならない。しかし、これはベトナムの国民のためだけではなく、まさに韓国国民、とくにこれから韓国を担う次世代のためなのです。日本も同じです。日本は過去の歴史に対し、韓国国民に謝罪をしなければならないと思います。これは、韓国国民のためではない。日本の青少年のためであります。」と。

最近、韓国では朝鮮戦争当時、「ノクンリ」という小さな村で起きた米軍の市民虐殺問題が再浮上しました。この出来事は韓国国民に反米感情を引き起こしました。しかし、韓国の市民団体、NGOは懸命に対処することで、この問題をベトナム問題と結びつけたのです。彼らは、朝鮮戦争当時のアメリカ軍の市民虐殺と、ベトナム戦争における韓国軍の虐殺を同じ次元で取り扱っています。これは、「アジア的価値」をまさに実践している姿である、と私はあえて主張したいと思っています。

アジアの民族はプライドが高いです。このプライドも大切なものだと思います。しかし、このプライドの高さが民族間の葛藤を引き起こします。日本でも、民族差別が起きていると思います。韓国でも同じことが言えます。外国人労働者に対する差別、搾取が深刻になってきていますが、韓国

政府は最近になって、やっと法的なレベルでの対策を準備しはじめています。このような問題の克服は、民族優越主義を克服してこそ解決されるでしょう。特に、日本と中国と韓国のそれぞれの民族優越主義が克服されない限り、「アジア的価値」の実現は難しいと思います。

先ほどの基調講演で川勝先生は、シドニーオリンピックで、韓国南北の同時入場について触れられました。和合と共存の問題についても触れられました。私は、今朝、「神戸新聞」を読んでびっくりしました。新聞の一面全面で、日本選手団の入場式の光景とともに、韓国南北の単一チームの行進を扱っています。隣の国に対する関心、そして問題の共有。これも、「アジア的価値」の実現の第一歩だと私は思います。

長くなりましたけれども、ありがとうございます。

高坂 それでは、続きまして、ステラ・クォー先生にお願いしたいと思います。

クォー ありがとうございます。きょうは、一部OHPを使いたいと思います。それによりまして、手短に私が主張したいことについての全体図を見せたいと思います。時間が非常に限られておりますので、できるだけ早くお見せしたいと思います。

皆様、ごらんになれますでしょうか。ここで、私が申し上げたいポイントは2つです。

まず1つは、すべてのコミュニティの社会資本をつくり上げる価値ということであります。2つ目は価値の変化、必然的な変化ということですから。西洋であれ東洋であれ、あるいは北であれ南であれ、グローバル・ビレッジ (global village) という考えがあります。どこのコミュニティにもあると思うのですが、私たちは自分たちの価値観によって、私たちが何ものであるかについての価値を見出したいわけです。それぞれが違ったコミュニティには異なった価値観があるわけで、その価値観の違いによって考え方も違われ、感覚も違っている。

以上をまず全体像としておきまして、2つのプロセスを考えてみたいと思います。私は社会学者

ですので、社会学的な視点から皆様にお話ししたいと思います。

現在私が研究している対象も含めてのことですが、私たちは経歴を遡ればそれぞれいろいろな大陸から来ているわけですね。例えば、私は南アメリカから来ました。また、北米で教育を受けました。私の祖先は、ヨーロッパからの移民です。夫はインドネシア人です。私自身、インドネシアやシンガポールに30年間住んで、さまざまな文化に触れてきたわけです。ですから、私にとりまして「普遍的な価値」ということは、非常に重要なことなのです。日本をも含めてすべての国にとって非常に重要なことです。

一体、どういうことが若い世代に起こっているのか。きょうのシンポジウムのタイトルは、非常に時宜を得たものであると思います。一体若者はどこへ行くのか。私たちはどこへ行くのか。ここで少し、2つのプロセスを見ていきたいと思います。すなわち「価値の伝達」(value transmission)と「価値の変容」(value transformation)というプロセスです。

「価値伝達」のプロセスは、親が子供に対して価値を伝達していくことを指します。重要な鍵となる価値を、子どもに伝達していく。私たちは何者なのか。私たちが正しいと考えることは何か。間違っていることは何か。そして、例えば世界を眺める上で、何が必要なのかというようなことを、子供に対して伝えていく。これが、価値の伝達ということであります。これは、家庭でもって行われるわけですね。子供に対して、ほとんどの鍵となる価値が親から伝達されていくわけです。それぞれの家庭というプライベートな空間でもって行われるということになります。

それから、もう一つ重要なプロセスは「価値の変容」です。価値の変容といいますのは、まず、私が2番目に申し上げたポイントにつながるのですが、必然的な変化、すなわち、避けられない変化を生み出します。価値が変化しないということはありえないわけです。価値はどんどん変化していく。そして、この価値の変容のプロセスが、どういったものかということについて、これからお話し申し上げたいと思います。

皆様の想像を喚起するために、例をあげたいと

思います。ここに1つ小さな丸を書きます。これを世代1 (G1) のものだとします。伝統的な価値を、最初の世代が持っている価値としましょう。例えば、100年前というふうにしましょう。どの過去の世代のことでもいのですが、第一番目の世代ということで、その価値が生まれた世代というふうに考えましょう。

そして、彼らが子供を持ちますよね。そして、子供の時代がG2、世代2としましょう。もし、コトがスムーズに進めば、あるいは争いがないとすれば、第2世代は、恐らく世代1が育んだ文化的伝統の中核となる部分をストックとし、これを伝達することになるでしょう。そして、ある一定の新しい価値が付加されるかもしれません。若い世代は、さらに新しい経験も積むわけですね。前の世代とは違った生活様式を送るかもしれません。ですから、最初の伝統的文化の核に加えて、新しい価値が加わるということにもなります。

そこで、世代3が登場します。第1世代、第2世代、第3世代と進むにしたがって、次々に多少の新しい価値が加えられていくわけです。このようなプロセスが同心円的に続いていくわけです。もちろん、これは仮説です。人生というのは、そんなにスムーズにいくものではありません。スムーズにいかなくて、ドラマティックなことが起こるからこそ人生は面白いのだとも言えると思うんですけども、とにかく予期しないことが起こるわけですね。

社会学者として、歴史的なプロセス、コミュニティーがどのように変化していくか、台頭していくかについて情報をいろいろと集めているわけですが、核的な価値というものがあったところに、どんどん新しい価値が加えられていっています。量的に増えていくこともあれば、同心円であったものがこのように少しずつ中軸がずれていったりもするわけです。例えば第2世代がもとのストックに対して、文化的な価値をたくさん加えたとします。それで、第3世代、第4世代とだんだんその中心軸がずれていく。あるいは、もとのストックをまったく包摂しきれないほどに、ずれてくる場合もあるかもしれません。

ご想像がつくように、その後の世代となると、もともとの中軸が分からなくなってしまうわけで

すね。第1世代で初め持っていた中核について、第4世代でもう分からなくなる。そうすると、世代間に大きな衝突、あるいはずれが出てくるわけです。第1と第4を比べてください。おじいちゃん、おばあちゃんから聞いたこと、第4世代はほとんどもう覚えていない、あるいは共有しないわけです。ですから、お互いに理解のできないコミュニティになってしまうわけです。文化的価値の伝達は隣接する世代間では当然あったはずなのですが、どうしても、どうしてこうになってしまうのでしょうか。どうしてこのような形になってしまうのかということを見てみましょう。

価値伝達と価値変容にかかわる要因は3つあるわけですが、価値がうまく伝達されるためには、3つの要因がきちんと揃わないとできないという事情があるのです。価値伝達のプロセスが影響を受ける要因の1つは、教育の進化、教育の進展であります。教育自身は前向きなもののはずですが、その効果あるいはその帰結となりますと、反対方向に作用することがあります。先生が、学校で新しいことをどのように子供たちに教えていくか、どのような形で教えていくか。さらにもっと高等教育が、大学でどういうふうに進められるかということが結果的に、文化的価値をどのように伝達し、また変容させるかに大きな影響を持ってくるわけです。

また、それがひいては社会がどのような方向に進展していくかをも示唆するものになるわけです。例えば、経済発展があったとしても、文化的価値次第で、絶対儲かるものかどうか、利益が上がるものかどうかは別問題になってくるわけです。親族、あるいは友人にだけに仕事を融通するとか、そういった特定の価値がもともとあったとして、そういった場合には、自分中心の考え方になるわけですね。私と、そして私の知り合い、友人、親族だけが仕事があればいいという考え方に なってしまいます。

しかしながら、知らない人が、もしも能力があったとしても、その考え方では仕事が回ってこない。そういった中では、やはり新しい価値を持ち込んで、例えば仕事を知り合いに回すだけではなくて、広告を出して、そして一番仕事のできる方、能力を持っている方に、公募でもって仕事を

回すということを、そういったシステムをつくっていかなくちゃいけない。そうすると、それまで世代間で伝達されてきた価値観の喪失につながるかもしれません。身内だけに仕事を融通していたのでは、経済的成功は叶えられません。そこには当然、価値の変容が生まれるわけです。このように経済的な発展という点が、2つ目の要因であります。

3つ目の要因は政治的な変革であります。価値伝達のプロセスの中で、個人への関係を考えた場合に、社会資本という観点から考えましても、行政とか政治的な変革というものが、価値の伝達、変容に大きな影響を持つということは明らかであります。

親が子供と一緒に住んでいけるか。社会がもしも大きく変わっていったら、そういうことができなくなる場合もあるわけです。ですから、このような3つの要素が、この価値の伝達、変容に大きな影響を与えるということです。以上については、私が以前に書いた『シンガポールにおける家族』（第2版、1988）という本のなか、特に第10章で詳しく述べておりますので、日本語訳はないかもしれませんが、できましたらご参照いただければ幸いです。

以上であります。どうもありがとうございました。

高坂 ありがとうございます。皆様には、社会学の教育と研究がどのような形で進んでいくかということも、合わせて感じ取っていただけたのではないかと思います。クォーさんの図式は、議論に大変役に立つと思いますので、また後ほど他のパネリストの方への質問の際にも利用させていただきたいと思います。

それでは、続きまして、杉本良夫先生にお願いしたいと思います。

杉本 私はオーストラリアのメルボルンからやってまいりました。このシンポジウムが始まります前に、高坂さんから、きのうのオリンピック開会式のように、時間が遅れたりしないように、時間内で話してくださいと言われましたので、10分という時間をきちんと守りたいと思っております。

私は27歳まで日本で暮らしまして、それからアメリカで6年、オーストラリアで27年、総計33年間、非日本社会で暮らしてまいりました。この期間、最も長く生活したオーストラリアでは、近年、アジア地域からの移民の、全移民の年間移民数の3分の1が、アジア地域からの移民という状態になっております。このためオーストラリアでは、ヨーロッパでもなくアメリカでもない社会が出現しておりまして、さまざまな民族集団の間の生活様式とか、価値観のせめぎ合いが起こっております。

こういうふうなマルチカルチュラルな社会で暮らしながら、私自身が日本出身のオーストラリアでの生活者として、日本人というのは一体誰のことであるのかとか、日本的とはどういうこととか、あるいは日本文化とは一体どういうものなのかといった問題を、長い間、非日本社会の中で考えざるを得ない状態が続いてまいりました。その過程で、私はステレオタイプに基づく日本像とか、日本人論の危うさを非常に強く感じるようになってまいりました。

オーストラリアの多文化主義というのは、この社会に住むさまざまな民族が、自らの文化を維持・促進するということを奨励するものなのでありますけれども、アジア人の価値をこの社会の中で主張するとはどういうことなのかということについては、今でも自分自身で回答を持ってない状態しております。私の家の近くには、例えば、インド出身の家族が住んでおりますが、彼らの中には、頭にターバンを巻いて道を歩いている人がおります。イスラム系の女性の間では、彼女たちの宗教信条にのっとったスカーフを巻いて歩いている人も多いわけです。こういう手法に従って、日本出身の私が、例えば浴衣がけで下駄をはいて歩きながら、毎日ウチで寿司を食べていれば、それで多文化主義に貢献していることになるとも思えないわけです。

日本的価値というものが、本当にあるのだろうかということについても、私は非常に懐疑的です。日本的価値を推進するといいましても、日本社会の中には若者と高齢者、あるいは男性と女性、あるいは青森と沖縄、あるいはサラリーマンと自営業者などの間には、さまざまな価値観の違

いがあって、一様な日本的価値観があるとはいえないと思います。あるいは、日本の中には「建前と本音」を区別する慣習であるとか、序列主義であるとか、あるいは天皇崇拝といった伝統がある一方で、判官びいきであるとか、あるいは「旅は道連れ、世は情け」というような考え方も強いわけであります。

それに、日本をアメリカとばかり比較するという習慣が強いのですけれども、日本をどのような社会と比較するかによって、日本の特徴づけも変わってくるだろうと思います。日本という一地域をとって見ても、日本的価値というものが、何であるかということを断定することができないのに、ましてアジア地域全体に共通する「アジア的価値観」というものが存在するという命題に、私は非常に懐疑的にならざるを得ないのです。

私は、アジアの若者の多様性をかいま見るためには、具体的な若者像というものをちょっと想像してみればいいと思います。例えば、タイのコンピュータプログラマー、フィリピンの自動車運転手、マレーシアの踊り子、西ティモールのインドネシア民兵、インドの電話交換手、あるいは日本の援助交際の学生、とかの間に、共通の価値観があるかどうかということを推し量ってみるといいと思います。私は、それらの間に共通するものはほとんどないのではないかという疑いを持つものです。

グローバリゼーションが非常に急速に進行をした結果、国家の枠組みというものが非常に緩んできまして、現在アジアの多くの地域では、若者たちの間に、社会的資源の格差というものが拡大しているというふうに、私は考えております。そのために、逆方向に働く2つのアイデンティティーというものが、発生しているのではないかと考えます。

一方においては、地球化とともに国境を越えて類似したスタイルとか、それから意識を共有する上層、ないし中上層部の若者たちのつくり出す、一種の超国家的潮流と申しますか、トランスナショナル・オリエンテーションといえますか、そういうものがあるのではないかと思います。彼らの多くは、比較的高学歴で、海外の生活の体験が多かれ少なかれあり、英語に堪能で、インター

ネットとかコンピューターを駆使して、一種のバーチャル空間というようなものを生活の一部としておりまして、テクノクラート（technocrat）層の予備軍になり、地球化現象の利益というものを享受しつつあるのではないかと、私は思っております。

各国共通のロック音楽であるとか、あるいはスポーツなんかを楽しみまして、国家への忠誠心というものは、次第に便宜的傾向を帯びるようになっていると、私は思います。世界各地で勉強しているアジアからの留学生、あるいは、今回この留學意識調査に答えを述べた人たちも、この範疇に入るのではないかと思います。

この次元の若者たち、比較的上層部にあるアジアの若者たちは、メディアとの距離が近いために、新若者文化としての可視性、ヴィジビリティ（visibility）というものが、非常に高いのではないかと思います。このために、新聞とかテレビとかで、この人たちの新しい考え方というのが、取り上げられやすいという土壌があるのではないのでしょうか。もちろん、国境を越える集団には、こうした社会の上層、あるいは中上層の人たちとは全く逆の位置にいる、社会の底辺の労働者がありまして、彼らは高い収入を求めて、他の国で労働力を得る若者たちでありますけれども、こういう人たちは、祖国とか、あるいは愛国心とか、いわば飯の種にならないような価値を中心にしては、とても生きていけないわけであります。

他方、こういうふうな過程から取り残された若者たちというのが、どのアジア社会にも発生しております。彼らは、自らのよりどころを逆方向に求めているのではないかと思います。国家の枠組みの弱体化とともに、彼らの間では、サブナショナルな民族、宗教、あるいは地域などに貢献する傾向が強いと思います。インドネシア周辺のティモール、あるいはアンボンなどは、そのいい例ではないのでしょうか。

こういう土着的価値に傾倒する若者たちは、高等教育とかIT革命とかからは、かなり離れたところにおりまして、グローバリゼーションによる社会的下降感、「下の方へ落ちていく感じ」というものを味わっていて、そして、その被害者であ

るという意識が強いのではないのでしょうか。そうして、その多くは、自らの献身対象となる価値に対して熱狂的であります。この階層においては、宗教的な原理主義の台頭とか、地域民族主義の表面化などが見られます。伝統的と考えられる価値に対する回帰、戻っていく気持ちというのが顕著だと思われます。このような領域では、世代間のギャップというのが、急速に広がっているというふうな兆候は少ないのではないのでしょうか。

そして、この2つの両極端の中間に、はっきりした方向性を持たない、圧倒的多数の若者たちがいて、彼らはこれまでの使い古された国家観とか、あるいは慣れきった経済慣習というものを維持しながら、2つの極を揺れ動いているのではないかと思います。したがって、私は、「アジア的な価値」の存在というのは自明ではないということから議論を進展させたいと思うものです。

時間になりました。

高坂 ありがとうございます。これで、まずは3名のパネリストの方々から、それぞれ基本的な見解をお出しいただきました。この後、基調講演をしていただきました川勝平太先生に少しお話をお伺いして、さらに3名のパネリストの方々に、私の方から少し質問をさせていただきたいと思っております。

川勝先生は、経済史がご専門であります。基調講演をお伺いいたしましても、マクロな大きな話のところがございました。それに対して、それぞれのパネリストからは違った観点から、それぞれのご体験をもとにお話がありました。川勝先生の基調講演がどこでそれらの見解と切り結ぶのか。先生の一番ご関心を引いた点を取り上げて、ご感想をお話いただければと思います。

川勝 難しい質問をいただきまして、ありがとうございます。私は基調講演の際に既に40分もいただいておりますので、5分ほどだと思います。チョン先生、クォー先生、そして杉本先生、いずれのご発言にも、負けず劣らず同じように感銘を受けたものであります。どれか一つというのは、難しゅうございます。それぞれに、皆おもしろいということでした。

チョン先生が、西洋と東洋という、そういう区別を出されました。私は、東洋と西洋、あるいはオリエント (Orient) とオクシデント (Occident)、あるいはウエスト・アンド・イースト (West and East)、あるいはエイシャ・アンド・ヨーロッパ (Asia and Europe) と。これほどよくわかるものの見方というのは、ないと思うのですね。日本も長い間、西洋というものを目的にしてきましたので、西洋ならぬ東洋的価値というものを捜そうとしてきたと思います。

しかし、杉本先生が冒頭で言われたアボリジニーというのは、西洋人でしょうか、東洋人でしょうか。あるいは、パラオの人、マーシャルの人、あるいは広くメラネシアやミクロネシアやオセアニアの人たちと、ポリネシアというような人たちは、果たしてアジア人なのか西洋人なのかというと、私はどちらの影響も受けていらっしゃるでしょうけれども、どちらでもないというふうに思うのです。ですから、世界というのは、東洋と西洋を合わせたよりも大きいというふうに思います。そういうものが地球的観点であろうというふうに思うのであります。

ただ、西洋以外の地域が西洋の大きな影響を受けたということが、間違いのない事実でありますので、その影響から自立しようというときに、非西洋的価値を模索しようというところに、共通性があると思いますけれども。その基礎になっているものは皆違うと。だから、アジアは一つではなくて、一つ一つだというふうに言うことができますと思います。その一つ一つの単位が何かといいますと、これは民族であるとか地域であるとかと言われかねませんけれども、しかし、一番の基礎は一人一人だということになろうかと思うのです。

そこで、基礎になっている自己の人生を顧みても、これはクォー先生が言われましたように、それなりのアイデンティティー、つまり連続性を持っている、自己としてのインテグリティ (integrity)、統合性というものを持っているわけですが、しかし、人間は変わり得るわけですね。世帯ごとにももちろん違いますし、同じように育てたいと思っても、子供は学校や友達の影響で変わります。あたかも、日本の歴史が東洋の文明を入れて変わる、西洋の文明を入れて変わるよう

に、文化というのは変わり得るのだということが、大切であると思います。

その変わり方について、他方からの影響、また自己の努力による影響、外からは政治とか経済と、あるいは教育というものが重要であろうと言われましたけれども、内部から変わろうというものもあると思います。文化というものについて、おまえのところとは違うというステレオタイプなものの見方ではなくて、人間は変わり得ると同時に、実は、互いに変わり合う存在であるということ、クォー先生は示唆されたのではないか。トランスフォーメーションというのは、エデュケーション (education)、それからポリティカル・パワー (political power) でしょうか。それから、エコノミック・ディベロップメント (economic development) と。こういうものによって変わると言えました。外からの力が変わるということは、自己が変われば、また外を変えることができ、互いに変わるのではないかと思うのです。

そうした中で、私はお互いに関わり得るからということで、ある地域が、あるいはある文化が、あるいは自己自身が他人にそれを押しつけるというのは、正当かどうかということを考えてみるべきだと思います。私は、日本が戦前期あるいは戦中期に、日本の文化を他地域に押しつけようとしたという、そのことの帰結、そのプライス、代価を今払っているのではないかというふうに思うのです。文化は違う。それぞれの違いというものは存在理由があると。

そうしますと、そこで出てくる力とは何だとなりますと、それは暴力とか威嚇とかということではなくて、引きつける力であろう。それは魅力であろう、感動であろう。それに引きつけられて人が変わるとき、その人は自ら変わっていき、そしてその周りの人が変わっていくことによって、私自身も変わり得ると、あるいは、その文化自身も変わっていくということであろうと思うのです。

ですから、これからの時代の、文化の時代の、力の源泉というのは、押しつける暴力とか、そういう暴力の威嚇とかということではなくて、引きつける力、魅力、あるいはその文化の相違を越えてあるであろう、魅せられたときの表現の仕方というのは感動だと思います。その魅力とか感動と

いうことが、これからの時代の根本に置かれるべき、いわば力というものがあれば、力であろうというふうに思うわけであります。

高坂 ありがとうございます。

チョン・ジーヨンさんは、最初の報告の中で、かなり密度の高いことをおっしゃったと思います。したがって、一つ一つの作品の背景等を十分に把握していないと、少しわかりにくいところもあるかと思います。私は、韓国の社会をよくは知りませんので、それをも交えてお教えいただきたいと思いますが、韓国の若い人たちも、どんどん考え方が変わっているだろう。そして、特に『ホワイ特・バッジ』で取り上げられた、韓国におけるベトナム戦争という問題も、ベトナム戦争を知らない世代がどんどんふえてくることによって、どのような世代間のギャップが生じているのか。あるいは、それが克服されようとしているのか。

ちょうど、ステラ・クォー、私は第2ラウンドから少しリラックスして「さん」づけで呼ばせていただきますが、ステラ・クォーさんが最初にOHPでお示しになった、ジェネレーションの1から2、3、4というふうに価値が変化していくという、あの図式をチョン・ジーヨンさんに思い出していただきまして、あの図式を利用するならば、韓国の社会ではどのような世代間葛藤とか、世代間のギャップが起こっているのか。あるいは、起こっていないのか。その辺の率直なところをお聞かせいただければと思いますが。チョン・ジーヨンさん、よろしくお願いいたします。

チョン 私は『ホワイ特・バッジ』という映画を通じまして、お話し申し上げたいと思います。この映画が出る前は、韓国の青少年は、ほとんどこの戦争について知りませんでした。1964年にベトナム戦争が終結した後、韓国では軍事政権が占めておりました。この軍事政権下では、ベトナム戦争への参戦について、韓国の経済的復興を呼び起こしたというふうな見方で、余り教えてきませんでした。

すなわち、クォー先生がおっしゃいましたように、教育過程において、韓国の非常に重要な問題

であるにもかかわらず、過去のそういった問題について触れませんでした。したがって、ベトナム戦争によって起こった個人的な経済的發展ばかりに重点が置かれました。韓国の若者たちはアメリカ映画を通してしか、ベトナム戦争のことを知らなかったのです。『プラトゥーン』とかの有名な映画を通じて、韓国の若者たちは、ベトナム戦争というのはああいうものだったんだというふうに認識したわけです。

私が『ホワイ特・バッジ』をつくったことは、非常に衝撃的に受け止められました。韓国がベトナム戦争に参戦し、私たちはこんな苦労をしたということを知らなかったんだ、と。映画館には、ベトナム戦争に参戦した人たちが、自分の子供たちを連れて、自分たちが経験した内容を描いた映画なんだというふうなことを伝えるようとした場面も見られました。この映画がベトナム戦争に対する韓国の参戦を批判的に描いたものであったことを知って、連れてきた子供たちを途中で外に連れ出してしまったこともありました。子供たちに誇りを持って映画を見せようと思った人たちが、そういった視点から描かれた映画ではなかったわけですから、途中で出ていってしまったわけですね。ですから、私たち既成世代は、政府から一方的に教育されたものをそのまま伝えるという役割を果たしてしまっただけではなかったのでしょうか。

世代間ギャップというものが外部の力によって起こっているということを、自分たちは解きほぐしていかなければいけない。こういったことが、文化に携わる私たちの任務であるというふうに私は考えます。韓国の若者たちについては、日本の若者と同様に、世代間格差というものを感じざるを得ません。現在はやはりアメリカが世界秩序を席巻していますし、世代ギャップの存在するのは、アメリカ文化に対する嗜好的傾向が支配しているせいではないのでしょうか。

それにもかかわらず、先ほど申しましたような日本の若い女性であるヤマダさんという方の話をしましたけれども、こういう方があちこちにいるわけです。また、既成世代の中にも意識のある人たちは、こういったアメリカ文化に傾倒した嗜好傾向を克服していこうという動きを見せています。

高坂 順番を変えまして、杉本良夫さんにお伺いしたいと思います。「アジア的価値」という形で、一つのまとまりがあるということに対しては、疑いの目を持って望もう、むしろ若者の間で、いろんな分裂があるのではないかという問題提起がありました。特に、社会的格差ということで、最近のグローバリゼーション、あるいは情報革命といわれるような動きのなかで、その権益を享受しているいわば上層の若者たちと、そこから取り残された下層の若者たちと、そういう2つの層に分化しているのではないかというお話があったと思います。

私からの質問は、その上層の若者たちというのは、果たしてどのような普遍的な価値を内包、つまり、うちに秘めているのかどうか。民主主義、表現の自由、環境保護というふうな価値と、その上層の人たちは結びついているのかいないのか。あるいは、結びつく可能性を、杉本さんご自身感じ取っていらっしゃるのか。むしろ、そこに対しては悲観的なのか、そのあたりについてお答えいただければと思います。よろしくお願いします。

杉本 うわあー。大変な問題ですね。そうですね。私は、初めに申しましたように、アジアの若者が、全体として普遍的な価値を創出できるかどうかというふうに問題を立てること自体は、余り意味がないと思います。世界の人たちが共有する価値というものは、どこから出てきてもいいし、今、川勝さんがおっしゃったように、一人一人が発信をしてもいいというふうに思います。ただ、北米や西ヨーロッパのメディアや教育機関が、考え方の流通機構を支配しているというところに、一つの大きな問題があるということは否めないと思います。

高坂さんの出された問題は、非常に難しい大きな問題ですが、2つの可能性というものに期待が持てるのではないかと私は思います。一つは、アジアに発生している多くの越境人間。この人たちは多くは、先ほど申しましたように、上層や中上層部に属しているわけですが、こういう越境人間の共有する価値に対して、明確な表現を与えられる必要があるのではないかというふうに思います。

21世紀には、資本とか技術とか製品とか情報だけではなくて、人間の国境を越えた移動が、ますます盛んになることは目に見えております。したがって、国家装置というものは、相対的な力を失うのではないかと、というふうに私は考えます。アジアでもこういう現象は急速に進展しているのですが、こういう越境人間たちが、2つ以上の言語とか文化とか民族とか地域の間を行ったり来たりしながら、単一国家、あるいは単一地域だけを背負って生きるのではなくて、複数の価値観の間を揺れ動きながら、暮らし始めているのではないかと、というふうに思います。

そういう不確定感や不安定感を持って暮らしている人たちの間に発生する共通の問題とか、意識とかいうものが、一つの普遍的な価値の構造をつくる道筋というものがあるのではないのでしょうか。その価値観というものは、具体的にいえば、国家主義への嫌悪感とか生き方の多様性の確認とか、あるいは、文化の相対性の認識といった構成要素を持つと思われます。

これはアジアだけに起こっていることではなくて、世界のほかの地域でも、この種の、私のいう越境人間というのは増加の一途をたどっておりまして、これらの人々の間の共同合作という時代が始まっているというふうに、私は思います。

それから第2に、アジアの多くの地域では、協調とか調和というシンボルが広く使われています。そのことについてはチョンさんも触れられましたが、こういう標語が権力関係というものを抜きにして、民族関係、男女関係、環境問題などに適応されることが望まれるし、そういう道筋があるのではないかと思います。例えば、日本が「和」の社会であるのなら、その原則というものが在日のコリアンであるとか、あるいは外国人労働者に対しても当てはめられるべきではないでしょうか。韓国では、例えば家族の調和というのが重視されているのだと言うならば、女性の家庭内での地位とか職場での昇進に関して、男性はどのように協調するのかということが、問われなければならないというふうに、私は思うわけですね。

それから、アジアには自然の共生というような伝統があるというのであれば、それがどのように

実質的に実行されるかということが、問われなければならないと思います。つまり、アジアにおけるマイノリティーの調和、アジアにおけるフェミニズム、あるいはアジアにおけるエコロジー論というようなものが、いわゆる欧米のそれとは、どういうふうに異なっているかが、広く明示されていると言いはないで、これまでのアジア的価値論というものが、私の考えでは強権国家擁護論というような色彩が強かったのに対して、ナショナリズムから解放されて、アジアの歴史的な現実には則した語彙とか、あるいは概念というようなものが開発される必要があるだろうと思います。そういうものが、欧米発の語彙とか概念とつき合わされながら、より普遍的なマイノリティー論、フェミニズム、あるいはエコロジー論などというものが生まれるのではないかと、そんなふうに考えております。

高坂 ありがとうございます。

それでは、今の杉本さんの発言を踏まえて、クォーさんに質問をしたいと思います。ご存知のように、シンガポールは多民族国家、複合国家という意味では、オーストラリアに勝るとも劣らない存在だと思います。シンガポールの場合、その複合性からあらわれてくる共通項、杉本先生は、その共通項から普遍的な価値が生まれるのではないかとことを示唆されましたけれども、シンガポールの場合には、その複合性からどのような共通項が生まれようとしているのか。あるいは、そうした共通項があるとすれば、それを私たちは普遍的な価値という位置づけをしていいものなのかどうか、それを一つお伺いしたいと思います。

もう一つ質問があります。もう一つは、このシンポジウムのタイトルをごらんいただければ分かりますが、日本語では「アジア的価値」という副題をつけました。リー・クワンユーという上級相が、何年前かに「アジア的価値観」という話をいたしまして、これはアジアの経済を活性化する、そして、その根拠にそういう議論を持ち出したということを、私たちはどうしても忘れるわけにはいかないわけでありまして。私たちは、とりあえずはその「アジア的価値観」という言葉とは区別する意味で「アジア的価値」というふうにしたつも

りでありますけれども。シンガポールで若い人たちは、そのリー・クワンユーが使った「アジア的価値観」という考え方について、どのように今受け止めているのか。それについても、コメントをいただければと思います。よろしく願いいたします。

クォー 2つの質問を頂きました。まず、最初のご質問についてお答えしましょう。シンガポールという都市は近代的で多様性（diversity）からなる先進的な都市ですが、そこに共通の価値あるいは共通項があったわけではありません。シンガポールは社会学者にとっては非常に魅惑的な国、さまざまな異なる文化をもった小宇宙で、それぞれの文化が今日のトピックである「アジア的価値」を体現しています。もっともここで「アジア的」と申しますのは「平等の」といった意味でして、シンガポールは決してある意味では「多文化社会」（multicultural society）とは申せません。なぜなら、すべてのコミュニティはアジア人からなっているからです。しかしながら、多様性が存在するということは事実であって、日常生活のほとんどすべての側面において、絶えずグループ間で差異（differences）が見受けられます。

大急ぎでその差異の概略について述べますと、まず数から言って、人口の大多数が中国人で、これが約78%を占めています。2番目の大きなグループといたしましては、マレー人で、これが大体15%前後を占めています。もう一つのグループは、インド系ということになって、これが約8%です。もっとも、私たちは便宜上「インディアン」というふうに呼んでおりますけれども、インド系の中にもインドのそれぞれの地域から来たエスニック・グループがあります。そして、非常にマイノリティーになりますが、2%以下が、統計学者や人口生態学者の言うところの「アザーズ」（その他）です。「その他」は、中国、マレー、インディアン以外のさまざまな民族グループからなっています。

過去30年ほどにわたって見られたことで何が興味深いことであったかと申せば、シンガポールは独立するまで、英国の植民地だったわけで、それぞれのグループは幾分サバイバル（生存競争）

モードにあったということでもあります。天然資源が少ないということもあって、それぞれのグループは少ない資源を求めて互いにほとんど角を突き合わせながら競争し合っていたということなんです。人種的な闘争もありましたし、民族間でも闘争がありました。中国人とマレー系の中国人の間、あるいはインド系のエスニック・グループとのさまざまな抗争があったわけです。また、宗教的な含みもあります。マレー人はイスラム教徒ですし、中国人のほとんどは仏教等を信仰しているということから、宗教上の対立もあったわけです。

そこヘリー・クワンユーが登場したわけですね。彼が政権の座についたとき、この国には事実上「ネーション」としてのまとまりがなかったのです。種々さまざまなグループが多量の自意識をそれぞれに抱いており、言語も分裂要因となっていて、民族はお互いに余りよい印象は持っていないで、互いを潜在的な敵であるかのように受け止めていたのであります。そこで、リー・クワンユー氏が登場してきたということになります。歴史的経緯について詳しく述べるだけの時間的余裕はありませんけれども、クワンユーが採った主たる一般的政策は、もやもやとした多様性の中に統一性（union）をつくりだそうとしたことにありました。すなわち、すべてのシンガポール人に共通したナショナル・アイデンティティーを築こうとしたのです。そして同時に、私たち自身の文化に対しては誇りをもち、シンガポール人と呼べる「市民」として誇りをもちうるような政治的な存在となれるようにしようという点にあったのです。今私たちはその存在を非常に「チャミング」で「ナイス」と呼んでおります。まず、市民があり、そのなかに中国人とかという多様なグループがいる。さらに、中国人の中に、フーケン（福建人）である広東人とかハッカ（客家）であるとか、さまざまな人びとがいるわけです。マレーシアの中にもまたさまざまな人びとが含まれているわけです。先祖がインドネシアから来たもの、マレーシアから来たものというふうな。インド系もそうです。インド系でもさまざまな地域から来たということで、その多様性は非常に豊富です。

そこで共通項が何によってもたらされたかということですが、変化がどのようにして起こったか、ここで、非常に重要な働きをしたのは一私か、国家が重要だと言うのはこういうことなのですが一法律の制定でした。一例だけあげますと、公的には人種主義的な行動を思わせる話題について話すということを禁ずる法律ができたのです。公的な広場で、例えばこの人種は好きじゃないというようなことは、決して言うてはいけません。そして、私のエスニック・グループはあのグループよりもいいというようなことは言うてはならないということになったのです。もしそうしたことを口にすれば法律違反になります。どうしてそうしたのかと申しますと、こうした言動は極度にセンシティブな問題ををはらむからなのです。このように法律でもって整備したとことで、私たちは共通項としての一つの価値を見出すことができたということになります。

これが30年前に行われたことです。多様性に対して尊厳を持つということ、そして、すべての人びとが人間としての尊厳を持っているのだということ、これが重要な鍵となる共有価値です。それを認めることによって共通項が生み出されたということでしょう。これは、まさに政治的リーダーシップによってつくられた価値だといえます。私たちが生き延びるためには、いわゆるルールですとか法律というものが必要だったわけです。そして、まず人間に対して尊厳を持つということ、これが実際に具現化されたということになります。

また、経済的な発展も必要であるという気持ちもあります。私たちは、自分たちのコミュニティの友人たちだけに仕事を優先的に与えるとか、恣意的にある人だけ給料を上げてあげるとかはできません。私たちはメリトクラシー（meritocracy、業績主義）に則って、仕事に対して一番の能力をもっている人間を雇わなければいけない。一番よくできる人こそ昇進させなければならぬ。そういう公平性と透明性も確保されているわけです。

じゃ、どうやってその判断をするのかですが、それでも、それなりの誰も見通せる透明な尺度をつくって、それに則って測定しようとしています。こうやって社会の、そして国家のルールというも

のを一からつくったわけですね。もちろん、ほかにいろいろお話ししたいこともあるのですが、今はお話しした2つの点が、高坂さんのお尋ねになったことへの一応のお答えになるかと思います。

2つ目の質問についても、お話ししてよろしいでしょうか。2つ目のご質問は、若い人たちがどのように受け止めているかという問題でした。おっしゃるとおりですね。韓国のお話をお聞きしていて、同感していた点があるのですけれども、シンガポールでも同じような、いわゆるジェネレーション・ギャップが見られます。

若い人たち、例えば20代の人たちや10代後半の人たちは苦労をまったく経験していない。戦争の苦しみという経験もないというのが現実です。自分の祖国がめっちゃめっちゃにされたという思いありません。こういった苦労、あるいはみじめな思いというのは教えることはなかなかできません。自分で経験してみないとわかりません。これは本当に深刻な問題だと言われてきました。シンガポールが実際ここまでくるのに、どんなに苦労があったかということ、戦争でめっちゃくちゃにされた焦土化した国が、ここまでくるのにどれだけの苦労があったかということを若い世代に分かってもらわないといけません。

ところが、日本もそうだと思うのですが、今の若い世代は本当に豊かです。何でも手に入ります。すべてが与えられています。そのことの有り難味が分からないと言って責めることはできません。実際苦労してそれを手に入れる、その苦労を経験しないことには、やはり感謝することができないわけですから。

先ほどの基調講演でも、個々人はつくられた価値のなかで成長することできると、おっしゃいました。私も自分の体験を交えて話すことをお許しいただきたいと思いますが、私の父は医者でした。朝鮮戦争のとき、コロンビアは国連を通して兵を派遣した唯一の国だったのですが、私の父は若き医者として送られました。彼はその後ある価値を私に教えてくれました。戦地から戻った後、彼は韓国で従軍中に学んださまざまな貴重な経験と苦難についてまだ小さかった私に話してくれたのです。

彼は私に言いました。「いいかい。私はね、韓国の人たちの並々ならない禁欲主義と規律ある姿にびっくりしたんだよ」と。彼は医師として従軍していたわけですから、けが人があれば敵味方を問わず助けなきゃいけない。そういった大変な苦難と苦痛は、人間の魂が最善に傾くか最悪の形をとるかを目の当たりにする試験期であったわけです。父は青年として戦争の別の視点から多くを学びました。彼は韓国でコロンビア軍所属の医学博士となったのですが、異なる文化の違いについて多くを学びました。その後韓国から戻って、他文化に接して学び得た新しい価値観を、父親としての立場で私に伝えてくれました。

もちろん、彼はコロンビアの国の価値観を持っていたのですが、それはまさしく韓国で学んだ価値観と一緒にいることを語ってくれました。そうです、家族の大切さです。今にも死のうかというときに、一番大切に一緒にいたいと思うのは誰なのか、死ぬ直前に、誰の名前を叫びたいのか、それは一緒に従軍している同僚でも何でもなくて、自分の両親であり、子供であり、そして配偶者なのだと。このことが、医者や看護婦が下した診断だったのです。父は、社会学者ではありませんでしたが、従軍医としてこのことに大変心を動かされたのです。いわゆる孝行心という感覚は普遍的価値なのだとすることに気づいたのです。日本でも、もちろんこういった価値があります。実は、父は日本にも来たことがあるのですが、これが普遍的価値なのだと。ですから、私の家では小さいときからそうでしたが、コロンビアの子どもの多くは、韓国、日本の文化、アジアの価値観というものを朝鮮戦争に従軍した人たちの経験を通して学びました。

要約して申しますと、シンガポールの若い人たちはたしかに戦争の苦労といったことは知りませんが、これは彼らの責任とは言えません。生まれてきたのが、そもそも繁栄時だったわけですから。しかし、戦争の経験や繁栄の創出プロセス、どれほど戦後みんなが苦労してつくり上げたかということを知ってもらうために、例えば教育省ですとか、いくつもの中央官庁が知恵を集めて、歴史の授業で教えるとかといった努力をしています。

もちろん、これは本だけではなく、視聴覚を通して伝えることも必要です。子供たちや若い人たちが、博物館に行って視聴覚を利用して昔のことを学ぶということもしています。例えば、発表を聞くことで、戦争のときシンガポールはこうだったのですよ、私たちの何十年前はこのような状況だったのですよ、そして、その結果として今このような繁栄があるのですよ、と。そしてこの繁栄を続けていくのは、君たちの仕事なのですよというふうな形で教育しています。いずれにしても、このように価値観を、世代を越えて伝達するように努力をしています。

高坂 ありがとうございます。パネリスト相互の間で、いろいろとコメントをしたいという表情が窺えます。フロアからも議論に加わりたいという表情が、こちらから窺い知ることができます。ここで、10分間の休憩を取らせていただきます。その間に、既に出していただいております質問あるいは意見を、私の方で整理いたしまして、後半はそれを取り上げるところから始めて、パネリスト同士の議論も含めたいというふうに思います。それでは、10分間の休憩に入りたいと思います。

(休憩後)

司会 それでは、そろそろ皆様に書いていただきましたアンケート用紙などももとにしながら、意見のやりとりを中心とした、パネルディスカッションの後半を始めさせていただきたいと存じます。それでは、パネリストの方々、コーディネーターの高坂先生、どうぞお席におつきください。皆様、改めて拍手でお迎えください。

それでは、引き続きパネルディスカッションを進めてまいりましょう。高坂先生、よろしく願います。

高坂 まず、ご報告をしたいと思います。ここに83通の質問と意見書が届いております。これほどたくさんの質問や意見がいただけたことは、そのこと自体がこのパネルディスカッションが多くの方の関心を喚起したのだというふうに考えて、大変喜んでおります。私は83通のすべてを見ること

ができませんでしたが、事務局で同じ種類の問題を整理していただいております。そのうち大きく3つの点を取り上げて、パネリストのどなたかに答えをいただくか、相互に議論をいただくという形で進めていきたいと思います。

まず、初めの問題は宗教の問題であります。アジアの交流ということを考える場合に、宗教の問題を抜きにして語ることはできないでしょう。少なくとも、文化の多様性ということはこれまで議論してまいりましたが、実は、その根源は宗教の多様性ということにあるというふうに考えることもできます。その場合に、しばしば、それが本当かどうかわかりませんが、宗教がもとになって葛藤を生じ、摩擦を生じているという事実を避けることができない。そうすると、課題としては、私たちはアジアの多様性の中にある宗教的な葛藤—あくまでそれがあるとしてですが—をどう克服していけばいいのかという問題であります。これについて、十分うち合わせはしておりませんが、パネリストの中のどなたか、お答えいただければと思いますが。いかがでしょうか。

じゃあ、ステラ・クォーさん。

クォー ありがとうございます。多分シンガポールが大変いい事例になると思います。もちろん、これは普遍的な問題になり得ますけれども、シンガポールはアジアの中にあるわけですから、大変考えやすい例になると思います。いわゆる宗教観の衝突を避けるために、実際、血を流すような事態に至り得るわけですね。それを避けるために国家の方で、行政の一環として法律をつくりました。つまり、国家と宗教を全く分離すると。これは憲法でそのように決められております。

政府あるいは国家が、人びとのあいだに宗教的な志向に多様性があるときに、一つの宗教的志向に統一いたしますと、他が大変困る。あるいは不都合が生じるわけですね。ですから、国家といたしましては、宗教と国家とをやはり分離することが必要になります。現実的に考えてみても、宗教的な葛藤を避けるためには、シンガポールのように、国家が全く宗教的な志向とは分離されている方が、全員にとっていい状況になるのではないでしょう。

法律制定の一つの特徴として、国は例えば、宗教的な祭りですとか宗教的儀式とかは無条件に促進するようにしています。決して、抑圧するわけではありません。しかしながら、例えばシンガポール国家の宗教はこれですというのではなく、すべての宗教が対等に扱われるのです。例えば、国税や税金の面でも、資金の面でも、例えば国からの補助金が出る・出ないということに関しましても、すべての宗教を平等に扱います。ですから、特定の宗教を信仰できないというわけではありません。

高坂 他に、ご発言ございますでしょうか。

チヨン 韓国の場合、いろいろな宗教が共存しています。カトリック、プロテスタントはもちろんですが、仏教そして儒教、またイスラム教もございます。こういうようなものが共存しています。しかし、韓国ではこういったものの葛藤というものはありません。確かに、仏教なら仏教、カトリックならカトリックの内部で葛藤がある場合はございますけれども、韓国全体としては、そういった葛藤は起きておりません。

これは、先ほど申し上げましたように、お互いのことを認め合い、お互いを受け入れ合うという、東洋的な価値観があるからではないかというふうに考えております。ましてや、西欧社会のように、キリスト教が中心を占めているわけですが、韓国社会が、そのように受け入れて共存している理由というのは、そういった宗教を、宗教の教理をそのままを受け入れるというよりは韓国社会にあわせて消化しているという現状があるからではないでしょうか。そういうふうに、韓国社会にあわせて消化するというのが、先ほど申し上げたアジア的な、私たちの目指すべきアジア的価値ではないかというふうに考えます。

高坂 ありがとうございます。実は、昨日、一昨日と関西学院大学の西宮上ヶ原キャンパスでアジア太平洋社会学会大会を開催いたしました。その中で、私どもは、3種類の昼食を準備させていただきました。Bはビーフ、Cはチキン、Aはベジタリアンというふうに。それから、途中でお申

し出がございましたので、イスラム教徒の方には、金曜日にお祈りの場所を提供いたしました。特にこれといった場所ではございません。普通の教室でありましたけれども、その場所を使っていたいたわけです。

確かに、こうした経験をいたしましたけれども、これを前もって意識して準備していたかといえますと、正直なところ、十分には思い至らなかったという反省があります。これは、学会大会での話でありますけれども、もっともっと私たちは感受性豊かに受け止めていかないといけないなというふうに思っております。

第2の質問は、留学生問題であります。留学生、つまり生活の根拠を持った留学生のためのシステムという基調講演のお話は、大変勇気づけられる話でありました。では、具体的にどうすることがあり得るのか。どうやってもらえるのか。現になされている生活支援は、はるかに不十分ではないのか。

例えば、少し話が細かくなりますが、留学生はやはりアルバイトをしたい。そうすると、都心に近いところで暮らしていないと、比較的に有利なアルバイトに従事することができないというので、住居が繁華街、あるいは都心から離れたところにつくられても、実際は十分な生活支援とはならないのではないかというふうな現場感覚もあるようです。

そういうものを全部トータルにとらえて、どういうふうに考えていけばいいのか。そしてまた、留学という場合には、アジアの方々が日本に来られることだけを考えるのではなくて、こちらから出かけていく留学。つまり、交流と川勝さんはおっしゃいましたけれども、交流を全体として広げていくためには、どういう仕掛けが必要なのか。そのあたりについて、川勝さん、お願いいたします。

川勝 これは、日本の大学の大半が、その装置に欠けているということですが、大学は夜になるとがらんどくなりますね。要するに、そこに生活がないわけです。ですから、私は留学生会館をつくれとか、あるいは寮をつくれというふうなことを申し上げているわけではありませんで、学長、教

員、研究者が望めば、学長なんかの場合には義務として、そこに住む、あるいは住める権利があるというように、住み方を大学と生活を一体にしたつくりかえをするべきときに来ているということなのです。

例えば、昔ですと、延暦寺にしましても、高野山にしましても、僕も杉本先生も京都で勉強したことがあるのですが、京都だと妙心寺でも、皆そこで坊様が生活をし、かつ修行をする。だから、修業と学問と生活が、皆一体になっているんですね。そうしたものが日本にあるかというと、これは、一部先生が住んでいらっしゃるようなところはありますけれども、それをシステムとしてきっちりと実現しているところはないと思います。したがって、それを補うために2つほど例を挙げたいと思います。

1988年、今からもう足かけ13年前から、石川県が県を上げてジャパン・テントと、これは夏季集中大学というのをしています。ここに留学生の方がいらしたら、多分口コミでジャパン・テントのことはご存知だと思いますけれども。これは、応募が大変たくさんございまして、その中から300名ほど、大体70カ国から100カ国ぐらい、300名を選抜いたしましてホームステイをする。そして、幾つかの分野に、政治や経済や環境や日本の役割や、大きなテーマに分かれて勉強をする。その勉強よりも何よりも、何が一体留学生の間で魅力かというと、日本人の生活の中に入って一緒に暮らせると。これが日本の文化を知る機会になるという点です。実際に自分の日本語を話すことを試すことができるというわけですね。

今年でちょうど13回目になりましたが、この間、内外の先生、国連のガリ前事務総長などは、二度もお越しになって、この場合は英語で講義をなさいましたけれども。留学生の間での研究発表や、あるいは勉強会の基本的な言葉は日本語です。日本に来ているから、いろいろ日本語で話したいことがあると。ベトナム人の話す日本語と韓国の学生が話す流ちょうな言葉では、全くレベルは違いますけれども、中身を一生懸命聞こうとして、中身のいいものに皆拍手を送るわけですね。

これは3年ほどしてやめようということで始まったそうですが、今ややめられなくなっている

というような事情があるようです。これは、夏季集中大学ですけれども、これを文字どおり恒久的なものにすれば、これはそのまま生活と、それから学問とが一体になったものにできるでしょう。さしあたって、金沢は町全体を、その時期大学にしようということで、金沢町博覧会、町それ自体を博覧会にしようということで、今年から始めています。

もう一つは、今年の4月に九州の別府市に、立命館大学の付属機関として、Asia Pacific University というものができました。これは、ほとんど独立法人になっていますけれども、800人の募集人員の中で、400人が外国人ということにしたのです。果たして、それだけ来てくれるかどうかと思ったら、それ以上の倍率で、40数カ国、400人。なぜ来たのかというと、全員大学の中で住めるからなのです。

別府は温泉がありますので、留学生が温泉に行って「きょうはいい湯だった」という。「湯だった」と、普通の言葉で言うか、九州弁で言うか、大分弁で言うかわかりませんが、そういう言葉をだんだん学んでいくということは、喜びに違いないと思うのです。自分の国の人たちとだけ集まって、自分たちの言葉だけで話しているというのは、留学生としては、昔の日本で言えば、出島みたいなもので、ちゃんと日本と長崎の出島でオランダ人がそこから出てはいけなかった唐人屋敷というのがある。こういうふうな留学生会館的なものではなくて、生活がそこにあるためには、日本人の先生も学生も望めば、そこで住める権利があるとしなければならない。できれば、student の場合には、住むべきレジデンシャル・リクワイアメント (residential requirement) として、住むべき義務があると。そして、そこで一緒に生活する。これは、生活交流になります。

そうになると、相手のことが自分のことのようになってきます。そして、相手と自分との違いをなるべく際立たせたいということになって、韓国料理を今日はつくりたいとか、日本料理をひとつつくってさしあげると。私自身もオックスフォードで韓国の優れた留学生に、韓国料理のコチュジャンなどを教わって、こんなにうまいものが世の中にあったかというふうに思ったこともありました

けれども。逆に日本のみそ汁、あるいはおにぎりというものをつくってさしあげて、同じ海苔でも海苔の使い方が違うんですね。あるいは、お椀を、日本だとして食べないといけませんけれども、向こうではお皿とかお椀を上げるということは無礼に当たりますので、そのことのおもしろさというのは、生活をしてみて分かる。

相手と自分とが一体になるというような、そういう共同体的な、大学共同体、生活共同体というものを我が国はまだ持っていないのです。ですから、ここから変えないといけません。私は、その生活文化の広がり、実は文字どおりの越境人間というものが、でき上がっていく過程であると思うのです。

その中で、特にアジア域内から日本にお越しになるし、日本人の旅行も最高は、アメリカを除けば、韓国ですね。そして、中国、東南アジア地域です。ですから、文字どおり今、交流が起こっているし、経済交流は輸出も輸入もそれぞれ4割が対アジア、オセアニアです。実質交流が起こっている、それを運命共同体といったら何ですけども、相手のことを自分のことのように思える関係を強めていく。それは実際に生活をして、相手のことがよく分かっているということから来るんだと思うのです。

ですから、今の大学がどうすればいいか。根本的に新しい大学をつくることだと思います。日本の大学は、明治以来ものすごく数がふえてきましたが、すべてその学問の内容を入れるということに急な余り、それと不可分な生活というものを抜きにしてきた。奨学金があれば、自分で下宿を捜しなさいというようなことは、本当は非常に不親切なことではないかと思うのです。日本人自身が大学の中で住んでないから、そういうことになっているんだろうと思います。ラトローブの例なんか、僕は聞きたいと思いますが、オーストラリアはどうなっているか知りませんが、多分イギリスの影響を受けているということであれば、先生もそれから生徒も望めば住むことができる権利と義務があるに違いないと思うんですよ。

高坂 ラトローブにいく前に。今のは比較的答えやすい問題だったと思います。もう一つ川勝さんに

質問が集中していますので、それを受け止めていただきたいと思います。チョン・ジーヨンさんは、最初の発言の中で、日本の国民は韓国の国民に対して、戦争責任の問題として、謝罪するべきであるとおっしゃいました。ただ、それは韓国という国家に対して謝罪するのではなくて、日本の将来の若者に対して謝罪するべきであるというふうな表現をとられました。なかなか含蓄のある表現と考え方ではないかと思うんですが。川勝さんは、「交流は平和へのパスポート」というふうにおっしゃいましたが、多くの質問がきております。平和へのパスポートとしての交流をするために、過去の戦争責任という問題を迂回して済ますことはできないのではないかという意見であります。時間の関係上、余り長く論じていただく余裕はありませんけれども、一言お願いしたいと思います。

川勝 これは、教科書問題でもありますね。教科書というのは、文部省の検定を受けて、そして書かれますね。ですから、国家のいわば公認の歴史観ということになります。しかしながら、これからの時代は、インターネットでいろんな韓国人の持っている日本観、韓国で教えられている教科書の内容、それから、日本の教科書の内容というのが、お互いに自由に知られるので、どれかの教科書によって教えられるべき時代では、もうないというふうに思っているんです。ですから、はっきり言うと、文部省の役割は終わったとさえ思っています。そんなこと言うと、ちょっと怒られるかもしれませんが。そういうものがなくても、義務教育のようなものは、地域でさえできる。ですから、義務教育も毎週6日間も5日間も行くべき必要がある時代ではないと思っています。

そうなりますと、地域間交流の中で、例えば、およそ北九州の方はどこに行っても日本語とハングルとそれから英語、場合によっては中国語も含めて、4つの言語で書かれています。そういう地域間交流の中で行われる青年の交流、教育交流というものは、おのずと日本人が韓国人にというよりも、僕と君と、あるいは僕の地域、僕の父親やあるいはおじいさんの経験と、それから韓国にお

ける自分の友達や友人や肉親ですね。その経験というものが共有されて、実感として、初めて心からこれはおかしかったという気持ちになる。なぜこんなことが起こったのだ、と。なぜ韓国と日本は同じようにヨーロッパに接していながら違う対応をとったのか、と。日本・中国・朝鮮、皆違う対応をとります。その辺から含めて、戦争だけでなく、戦争を起こした原因は何かということまで含めて、これはひょっとすると日本批判どころか、近代西洋のトータルな批判になるかもしれません。

しかしながら、それを受け入れた側の問題もありますね。チョン先生は、今アメリカの問題に物すごく関心を持たれています。だけど、恐らくオーストラリアですと、アメリカの問題よりもイギリスの問題でしょう。香港でもイギリスの問題だと思います。ですから、各国によって、国民が持っている対外的なイメージというのは違うのでしょうか、戦争に対する謝罪というものがある段階でやれば、それで済むというものではないだろうと思います。

だから、真に理解するためには、実は歴史観とか世界観というものが一つではあり得ないことをまず理解しなければならない。異なる世界観というものを許容するということにいくと思いますね。それはなぜかという、一人一人が違うからです。違うものを許容するという中から、自己の世界観の限界と、相手の世界観の良さ、あるいは限界というものが知られると思うのですね。

ですから、戦争責任を公式問題にしていくよりは、私は共に学ぶというような、そういう地域間交流というものをつくっていった方がいいというふうに思っております。そうすることによって、文部省のあり方、それから現在の大学教育のあり方も含めて、根本的に変えていくことができると思っています。それは、地域住民の自決でさえできるんじゃないか。韓国と日本の小学校・中学校の交流による、そういうカリキュラムを含んだ学校をつくることもできると思うのですね。国定でやるとできないかもしれませんが。

しかし、そういうものがまだ本当に必要な時代かどうかということを思い合わせますと、インターネットで学位が取れるというような時代です

から、そういう技術をつけている子供たちを前提にした場合には、face to faceの重要性が、つまりバーチャルリアリティの技術が進めば進むほど、アクチュアル・リアリティ (actual reality) となってきました。本当の現実というものの希少性が出てくると思うのであります。

そういう face to face の交流を可能にするというのは、実は生活レベルの交流でお互いに学び合う、そういう場所をどうつくっていくかというのは、杉本先生じゃありませんけれども、国家の力を思い切り小さくする必要がある。本当に安全保障や外交など必要不可欠なところだけやって、あとの福祉や教育や、あるいは地域の基盤整備ということも、単に地方分権ではなくて、財源も含めて自ら管理していくという地域自立の中での教育というものが、戦争責任の問題についての解決につながっていくというふうに思っています。

高坂 ありがとうございます。他にまだ質問・意見が来ています。韓国では、今、文化解放が進んでいる。そして、文化の交流ということと文化解放は、どこかで一致するところがあるわけですが、『シュリ』という映画について幾つか質問が来ておりますので、これはやはりチョンさんにお答えいただきたいと思います。『シュリ』という作品を、どういうふうにとらえていらっしゃるか、率直なところをお聞かせください。

チョン 『シュリ』という映画は、韓国内でものすごいヒットを飛ばし、興行的にも成功を収めました。だからといって、『シュリ』が持っている作品的な価値を評価したということにはなりません。南北は対話を通じまして、和解ムードが盛り上がっています。この時点で、『シュリ』は南北の葛藤を軸に描いたものですので、これに必ずしも合致する物語ではありません。『シュリ』は日本においても、ものすごい反響を呼んだという話を私も伺いました。言ってみれば、韓国映画が日本の大衆にそれだけ受け入れてもらえるような時代になったということだと思います。

逆に、日本の文化を解放したのは最近のことですけれども、日本の岩井俊二監督の『ラブ・レター』という映画が韓国の若者にもものすごい反響

を与えました。実際、韓国の若者にとって、岩井俊二監督は、私、チョン・ジヨンよりもはるかに人気が高いです。

ですので、この文化の解放、交流というのは、お互いの違うもの、異質のもの、敵対するものを解消するのに大いに役立つと思います。最初に申し上げました、お互いを認め合って、お互いの価値を認めるということ、これが「アジア的価値」だというふうに申し上げました。そういった観点から、『シュリ』という映画が日本で反響を呼んだということや、『ラブ・レター』が韓国でヒットを飛ばしたということは、大変大切なことだったと思います。

高坂 ありがとうございます。それでは、これといったトピックを決めませんが、オーストラリア、ラトロープへバトンタッチしたいと思います。

杉本 今まで、討論された問題を2、3拾って考えてみたいと思います。日本で、韓国の映画がヒットをするという状況は、やはり日本がかなり多民族社会であるということについて、自ら認識をしてきたということと相関関係を持っているのではないかとこのように思います。

戦争責任の問題について、謝罪すべきかすべきでないかというようなことも今、話題になりましたけれど、この問題については、例えば、オーストラリアで最近非常に広がってきているアボリジニーに対する文化の独自性と、それから過去にオーストラリアの白人社会がアボリジニーに対して行った虐待行為などに対して、どういうふうに向き合っていくか。どのような謝罪と、それから賠償というようなものを行っていくかという問題について、オーストラリア社会が向き合っている、その状況が参考にはなるのではないかと思います。

そのことが、例えば、昨日のオリンピックの開会式にも、非常に象徴的にあらわれていたのではないかと思います。多くの人々が過去の過ちというものを直視して、そうして今までマイノリティーであった人たちを、社会の一つの中心的なシンボルに据えるということを通して、社会の新しいバランス関係をつくっていかうという道筋は

あるのではないかとこのように思います。そのためには、やはり謝罪と補償の問題を避けて通ることができないという考えを、私自身は持っております。同じ問題が、日韓関係についても、日中関係についても生ずるのではないのでしょうか。

今後、日本の社会やアジア社会がさまざまな交流を進めていくことは、望ましいことに違いないのですが、我々は何のために国際交流をするのか、社会間交流をするのかということについて、よく考えてみる必要があると思います。もちろん、我々はお互いの違いを学び、多様性を知ることが必要なのですが、現在の社会間交流というものがある階層に偏っているということに、一つの問題があるのではないかと思います。

私は、今、川勝先生がおっしゃったように、例えば、大学の中に多くの留学生が日本の学生たちと一緒に住めるような状況がつくられることは、非常に望ましいと思います。そうして、そういう状況が、例えば、私のいるラトロープ大学にもありますし、そこでみんなが一緒に食事をつくったり、いろいろな言葉で話したりというようなことで、お互いに学び合うという状況はたしかにあります。

しかし、それよりももっと重要なことは、私の考えでは、交流の社会層がもっと広がり、そうしてもっと下がってこなければならないのではないかとこのように思います。その観点から考えるならば、今、話題に出ていましたホームステイのネットワークというものが、もっと広くもっと多くの地域で、きちんと確立されるということが望ましいのではないかと思います。

私も学生時代にいろいろな国を渡り歩いて、そうしてホームステイを経験したものですけれども、やはりそこで学んだもの、そこでその社会の一端をのぞいたということの記憶は、今でも消えていないのです。ホームステイの持つ役割は、日本社会でも非常に大きいし、あるいはほかのアジア社会でもますますその重要性を増してくるのではないかと思います。

高坂 ありがとうございます。かなり時間が経ってきております。残りの5分間ほどは、言い残したこと、是非これだけは言っておきたいとい

うことが、もしありましたら、それぞれ1分ないしは1分半ぐらいでメッセージを出していただければというふうに思いますが。どなたからでも。いかがでしょうか。

クォー この機会を借りまして申し上げたいことですが、私は、今日、意味深いことを学ぶことができました。そして、さまざまな方にお会いすることができました。今日は土曜日だというのに、多くの方が来てくださいましたことにも、お礼を申し上げたいと思います。

チョン 私が申し上げた中で、皆さん、もしかして西洋と東洋を対立概念でとらえた方がおられるのじゃないかというふうに、ちょっと心配をしております。対立概念で見るとするのは、まさしくこれは西洋の合理的な論理志向から来ているものです。東洋というのは、調和と共生の概念でやってきました。そういった概念がだんだんと失われつつありますけれども、これを取り戻さなければいけないと思います。今現在のいろいろな問題は、西洋的な合理主義では割り切ることができない、解決することはできないと。そういった意味でも、「アジア的価値」が世界に貢献するところが大きいということを、私は申し上げたいと思います。ありがとうございました。

高坂 ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

杉本 「アジア的価値」というのを問題にしてきたわけですが、この主題の発想の背景には、一種の文化的な相対主義というものを促進しようという、そういう意気込みを感じ取ることができるように思います。ただ、文化的相対主義を問題にする場合にも、その二重性について注意しておく必要があるのではないかというのが、私の考えです。

アジア 対 欧米という図式は、社会間の文化相対主義を提示するという意味では、一定のバランスを志向しているわけですが、その反面、アジアの内部、あるいは欧米の内部というものの多様性を無視して、ある部分の価値観とか、

あるいはライフスタイルをもって全体を規定するという意味において、一種の社会内文化帝国主義という方向にも傾くと思います。しかし、一方、その社会内の文化相対主義を強調すればするほど、逆に社会間の文化相対主義はだんだんその根拠を失いがちになるという問題もあるんですね。

つまり、この2つのタイプの文化相対主義、社会間の文化相対主義と、それから社会内の文化相対主義というのは、一種の、逆相関のジレンマの関係にあるのではないかと。そこをどういうふうに、これからもつれを解いていくかというのが、私たちにとって一つの大きな課題になるのではないかと。というふうな印象を持ちました。

高坂 ありがとうございます。基調講演からずっと長くおつき合いただきまして、お疲れかもしれません、最後に、川勝先生、一言を。

川勝 いや、最後は高坂先生がきっちりまとめていただければと思いますけれども。ここで、英語でアジア的価値は「Asian Values」となっていますね。ですから、これは一つではなく複数であるということです。無限に多様であるという意味合いが入っていると思います。ですから、チョン先生が言われましたように、西洋・東洋という、どうしても二項対立的な言葉なので、実は対立を調和させるということも含めた「東洋的価値」というものを強調されたのだという意味では、Asian Values はまさにグローバル・バリューズ (Global Values) であるというように置き換えることができるのではないかと思います。

そして、きょう韓国、シンガポール、オーストラリアというように見てきますと、韓国にも多様性が問題にされる風土がある。シンガポールはいうまでもなく、初めから複合的多民族社会でありますから、その中で生活共同体になりつつ、いかにしてそれぞれのディグニティ (dignity)、あるいはディーセンシー (decency) というものを保証するために、国家が法整備を整えてきているかということも分かりました。そして、私は杉本先生が日本は一つでないと言われたことの意味を、もう一度かみしめたいと思うのです。

日本が韓国に謝罪をした、日本が中国に謝罪を

したというとき、一体誰がしているのか。国民一人一人というものが違う。日本の多様性と、地域の多様性というものが改めて問われているのではないかと思います。それは言うまでもなく、大学の多様性ということもそうでありますけれども、日本の大学はどこに行っても同じであるというようなことであれば、真の個性というのはあり得ないと思うのであります。

日本もまた一人一人の日本人からなる日本であるということにおいて、一見日本は単一民族に近いので、日本にいる在日の人々、あるいはもともといるアイヌ人というような人も含めて、世界は皆多民族からなっているということからだけでなく、またその民族というものが、定義によって暮らしの立て方、生活様式を共有する人であるという、後天的な学習的な内容である。しかも、それは変わり得るというものだといえますならば、私は日本の多様性というものを形にしてあらわしていくべき時期に来ていると思います。そうした多様な一人一人がベースになって、その集まりが日本であるというところから出発しないといけない。対外関係というものも、何か一片の紙切れで済ませられるようなものには、絶対にならないと思います。

そのような意味におきまして、私は日本、それからいわゆる西太平洋地域の深まりが歴史的、経済的に趨勢として高まっていくということに鑑みれば、この地域に行っても、どこに行っても自分はそこで骨を埋めていい。「人間いたる所に青山あり」というふうに言われますけれども、そのような地域として、我々にとってかけがえのない地域だというふうに思われるような地域づくりが、今このいわゆるアジアと言われているところにおいて求められているのではないかと思います。それを果たすためには、実は、もっと交流を深めるということにあるだろう。その条件が、まだ十分に日本には整えられていないというふうに私は思っているわけであります。

高坂 ありがとうございます。私は、司会の役割をしながら、ずいぶんたくさんのことを勉強しましたし、刺激を受けました。例えば、シンガポールでなぜあれほど規制が強いのかということ

の意味も、きょう初めて、目から鱗が落ちるような思いで、私なりに理解できた気がいたします。

実は、今日のタイトルとサブタイトルには、いろんな思いがございました。余りどなたもおっしゃらなかったことではありますけれども、「試されるアジア的価値」。一体何が試されているのかということでもあります。これは、私の解釈では2つあると思います。一つは、「アジア的価値」と言われているものが、普遍的な、今言われたグローバルな価値というふうに育っていくものなのか。あるいは、引き続きといいますか、局所的なあるいは一地域の価値に終わってしまうのか。チョンさんは、アメリカ文化、アメリカ的な価値というのは、いずれ崩壊するであろうというふうなことを、予言者ふうにおっしゃいましたけれども、そういうふうに、「アジア的価値」と言われているものが、これから普遍的なものに育つか、あるいは局所的・地域的なものに終わるかが試されていると思います。

これは朝日新聞の7月30日付の新聞ですが、タイのバンコクの写真が出ております。若い女性は厚底をはいております。このように、日本で厚底がはやれば、少し遅れてタイのバンコクで厚底が流行するという現象は、確かにある。その意味で、若者文化というのは、いとも簡単に伝播していくというふうに思います。

しかしながら、厚底の広がり、それから思想の広がりというのは、やはり少し水準といいますか、次元の違うことでもあります。日本から出すメッセージが、例えばJポップですとか、アニメですとか、漫画ですとか、あるいはテレビドラマですとか、そういうものを通じてたくさん広がっていくということは、事実でありますけれども、留学生調査の結果に見られますように、日本では日本人の学生が留学生と、例えば政治のことについて話しをするということは大変少ないというインバランス (imbalance)、バランスのとれていない状況もあります。

そういう状況が、今度若者文化の中に混じって広がるということは、果たして、私たちとしてはどう考えればいいのかという問題も残るのではないかと思います。要するに、何が試されているのかということの第一番目は、この「アジア的価値」

というものが、普遍的な価値に育つかどうかということではないかと思います。

二つ目は、「アジア的価値」ということの背後に、そしてまた、紛争、葛藤の背後に、一体何があるのかということであります。価値観の違いというのは、当然あるわけですが、何かやはり理由があって、価値観の違いが生まれてくるということではないかというふうに思います。

インドネシアの作家でプラムディア・アナンタ・トゥールという人がおられます。『人間の大地』という作品で、世界的に衝撃的な受け止め方をされた、影響力の大変強かった方です。私は、この方のある言葉に大変惹かれている、そして気になっている言葉があります。「あらゆる争乱は、何らかの不正があるために起こる」。先ほど、宗教の話が出ましたが、私たちは宗教そのものの違いによって葛藤を起こしたり、摩擦を起こしたりしているのかどうか。そこにはひょっとしたら、別の不正ということが絡んではないかというふうに考えることも必要だと思います。「アジア的価値」ということによって、私は冒頭で政治とか経済それ自体の問題をこのシンポジウムの主たるテーマとしては取り上げないというふうに申しましたが、一旦価値観の話に戻った上では、再びその背後に何があるかということ、やはり私たちは考えないといけないのではないかなという印象を強く持ちました。

実は、このシンポジウムは、冒頭紹介がありましたように、この3日間、アジア太平洋社会学会という学会大会の一つの知的な打ち上げでもございます。この問題、つまり「試されるアジア的価値」という問題を、是非学会の規模におきましても、引き続き研究のテーマとして取り上げていきたいというふうに思います。そして、私たち学会だけではなくて、一人一人市民として、何をわきまえておくべきなのか。何を理解しておくべきなのか。私たちは社会学者の間でさえ、余りにも知らないことが多すぎるということに、昨日、そして一昨日気がつかされております。

例えば、現在、香港から大変多くの若い女性が中国本土に入っていく。そうしたときに、その若い女性たちは、中国の家族観、結婚観の大きな変化を生んでいるという話を、きのう聞きました。

私たち社会学者はもっともっといろんなテーマを取り上げていく。そして、市民の一人一人に返していけないといけないテーマが、たくさんあるんだなあというふうに思っております。

留学生調査では、アジアとはどういうイメージかと尋ねました。アジアは「非常に不安定である。だが、躍進している」というイメージです。将来こういうシンポジウムがきっかけになって、最終的には「安定しつつ躍進を遂げる」ということに、多少とでも役に立てばいいなというふうに思っております。

きょうは、大変お忙しい中、基調講演、そしてまたパネルディスカッションに参加していただきました方々、改めてここで感謝をしたいと思います。

そして、主催者の側の一人といたしまして、長時間にわたっておつき合いました聴取者の皆さん方、ありがとうございました。

司会 皆様と進めてまいりました関西学院大学、朝日新聞社共催シンポジウム「アジアの若者はどこへ行くのか—試されるアジア的価値—」ですが、もう目の前に迫りました21世紀を、私たちがアジア人として生きていくためのヒント、漠然としていても、このヒントみたいなものを感じ取って、持ち帰っていただければと思います。

これをもちまして、このシンポジウムのすべてのプログラムを終了させていただきます。なお、このシンポジウムの詳しい内容は、9月22日、金曜日の朝日新聞の朝刊に掲載される予定ですので、皆様、そちらもあわせて是非お読みください。本日は長い時間、ご参加まことにありがとうございました。